

局ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ

第三百七十條 控訴ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付テハ
始審ノ關席裁判及ヒ其故障ニ付キ定メタル規則ニ
從フ

第三百七十一條 檢察官其他訴訟關係人ハ輕罪裁判
所ノ終審ノ對審裁判言渡及ヒ控訴裁判所ノ對審裁
判言渡ニ對シ上告ヲ爲スヲ得

第四章 重罪公判

第三百七十二條 重罪裁判所ニ於テハ左ノ條件ニ因
テ公訴ヲ受理ス

一 豫審判事又ハ輕罪裁判所會議局ノ判決ニ因リ其
事件ヲ移スノ言渡

二 控訴裁判所又ハ大審院ノ判決ニ因リ其事件ヲ移
スノ言渡

第三百七十三條 重罪裁判所ニ移スノ言渡確定シタ
ル時ハ左ノ區別ニ從ヒ公訴狀ヲ作ル可シ

控訴裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ闕ク時ハ檢事長公
訴狀ヲ作ル可シ

始審裁判所ニ於テ重罪裁判所ヲ闕ク時ハ檢事長公
訴狀ヲ作り又ハ重罪裁判所檢察官ノ職務ヲ行フ可

キ檢事ヲシテ之ヲ作ラシム可シ

第三百七十四條 公訴狀ニハ左ノ條件ヲ記載ス可シ

一 被告事件ノ始末及ヒ加重減輕ノ模様

二 被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地

三 豫審ニ於テ集取シタル原被ノ證據

四 罪名法律ノ正條及ヒ重罪裁判所ニ移スノ言渡ノ

概畧

第三百七十五條 公訴狀ニハ重罪裁判所ニ移スノ言

渡書ニ記載シタルヨリ以外ノ事件又ハ被告人ヲ記

載ス可カラス

第三百七十六條 重罪裁判所ニ移スノ言渡書ニ同一

ノ被告人ニ對シ附帶ニ非サル數箇ノ重罪ヲ記載シ

タル場合ニ於テ檢察官ハ各別ニ公訴狀ヲ作りタル

上ニテ各別ニ辯論ヲ爲ストテ裁判所長ニ請求スル

ヲ得

裁判所長ハ同一ノ公訴狀ニ附帶ニ非サル數箇ノ重

罪ヲ記載シタル場合ニ於テ其職權ヲ以テ各別ニ辯

論ヲ爲サシムルトテ得又數箇ノ公訴狀ニ記載シタ

ル事件ニ付キ同時ニ辯論ヲ爲サシムルトテ得

第三百七十七條 書記ハ被告人出廷ヨリ少クトモ五

日前ニ公訴狀ノ謄本ヲ被告人ニ送達ス可シ
被告人數名アル時ハ各別ニ其謄本ヲ送達ス可シ

第三百七十八條 重罪裁判所長又ハ其委任ヲ受ケタ
ル陪席判事ハ公訴狀ノ送達アリタルヨリ二十四時
ノ後書記ノ立會ニ依リ被告事件ニ付キ被告人ヲ訊
問シ且辯護人ヲ選任シタリヤ否ヲ問フ可シ
若シ辯護人ヲ選任セサル時ハ裁判所長ノ職權ヲ以
テ其裁判所々屬ノ代官人中ヨリ之ヲ選任ス可シ
被告人及ヒ代官人ヨリ異議ノ申立ナキ時ハ代官人
一名ヲシテ被告人數名ノ辯護ヲ爲サシムルヲ得

辯護人ヲ選任シタルヨリ三日ノ後ニ非サレハ辯論
ニ取掛ルヲ得ス

第三百七十九條 辯護人差支アル時若クハ被告人ヨ
リ之ヲ改選ス可キ正當ノ事由ヲ申立タル時被告人
自ラ辯護人ヲ選任スルニ非サレハ前條ノ規則ニ從
ヒ裁判所長ヨリ之ヲ選任ス可シ但辯護人ヲ改選シ
タル時ハ三日間辯論ヲ停止ス可シ

第三百八十條 書記ハ第三百七十八條ノ場合ニ於テ
訊問ノ調書ヲ作り辯護人ヲ選任スルニ付キ其式ヲ
履行シタルヲ記載ス可シ

辯論中辯護人ヲ改選シ及ヒ辯論ヲ停止シタル時ハ
公判始末書ニ其旨ヲ記載ス可シ

第三百八十一條 辯護人ナクシテ辯論ヲ爲シタル時
ハ刑ノ言渡ノ效ナカル可シ

第三百七十七條ヨリ第三百七十九條マテノ規則ニ
背キタルトアリト雖モ辯論ニ取掛ル前ニ非サレハ
被告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲ストヲ得ス

第三百八十二條 辯護人ハ第三百七十八條ノ處分ア
リタル後被告人ト接見スルトヲ得

又書記局ニ於テ一切ノ訴訟書類ヲ閲讀シ且之ヲ抄

寫スルトヲ得

辯護人ヲ除クノ外何人ト雖モ重罪裁判所ニ移スノ
言渡アリタルヨリ裁判言渡アルマテ被告人ト接見
スルトヲ得ス但被告人現ニ勾留ヲ受タル地ノ裁判
所長ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

第三百八十三條 檢察官及ヒ民事原告人ノ請求ニ因
リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ開廷ヨリ一日前之
ヲ被告人ニ送達ス可シ

被告人ノ請求ニ因リ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ
同上ノ期限内ニ書記ヨリ之ヲ檢察官ニ送致シ民事

ニ付キ呼出シタル證人ノ氏名目錄ハ之ヲ民事原告人ニ送達ス可シ

第三百八十四條 前條ノ規則ニ從ヒ豫メ氏名ヲ通知セサル證人ノ陳述ハ事實參考ノ爲メニ非サレハ之ヲ聽クコトヲ得ス但對手人ヨリ異議ナキコトヲ申立タル時ハ證人トシテ其陳述ヲ聽クコトヲ得

第三百八十五條 證人ハ呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二日ノ猶豫ヲ以テ之ヲ呼出ス可シ

第三百八十六條 裁判長ハ開廳ノ日ニ當リ公廷ニ於テ陪席判事檢察官ノ面前ニテ開廳ス可キコトヲ陳述

ス可シ但被告人ヲ呼出ス可カラス

第三百八十七條 裁判長辯論二日以上ニ渉ル可シト思料シタル時ハ重罪裁判所々在ノ地ノ裁判所判事一名ヲ以テ豫備陪席判事ト爲スコトヲ得

第三百八十八條 裁判官檢察官及ヒ書記各其席ニ就キタル後即時ニ訊問及ヒ辯論ニ取掛ル可シ
裁判長ハ先ツ被告人ノ氏名年齢身分職業住所出生ノ地ヲ問フ可シ

若シ其答辭ト豫審中ノ陳述ト齟齬アリト雖モ公訴狀ニ記載シタル被告人ニ相違ナキ時ハ引續キ辯論

ヲ爲ス可シ

百九十八

第三百八十九條 書記ハ呼出シタル證人ノ氏名ヲ呼

立ツ可シ

其呼立ニ應シタル證人ハ扣席ニ退カシメ陳述ヲ爲
スニ當リ順次ニ之ヲ呼入ル可シ

第三百九十條 裁判長ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セ

シムルニ付キ注意シテ聽ク可キトテ被告人ニ告知
ス可シ

第三百九十一條 裁判長ハ書記前條ノ朗讀ヲ終リタ

ル後被告人ヲ訊問ス可シ

被告人豫審中ニ白狀シタル事件ヲ確認セス又ハ之

ヲ取消サントスル時ハ其事由ヲ辯明セシム可シ

被告人ノ白狀アリト雖モ仍ホ其取調ヲ爲サ、ル可

カラス

第三百九十二條 裁判長ハ前條ノ訊問ヲ終リタル後

證憑ヲ差出スニ從ヒ其證憑ニ付キ辯解ヲ爲シ且自

己ノ利益ト爲ル可キ反證ヲ差出スヲ得可キトテ被

告人ニ告知ス可シ

第三百九十三條 裁判長ハ原告證人陳述ヲ終リタル

毎ニ被告人ニ意見アリヤ否ヲ問フ可シ

百九十九

第三百九十四條 證人ハ陳述ヲ爲シタル後其扣席ニ留ル可シ但裁判長ヨリ退廷ノ允許ヲ得タル時ハ此限ニ在ラス

陪席判事檢察官被告人及ヒ民事原告人ハ更ニ證人ヲ訊問スルト又證人ヲシテ他ノ證人ト對質セシムルトヲ請求スルヲ得

裁判長ハ職權ヲ以テ前項ノ處分ヲ爲ストヲ得

第三百九十五條 裁判長ハ證人愛憎畏懼ノ念ヲ生シ被告人ノ面前ニ於テ充分ナル陳述ヲ爲ストヲ得サル可シト思料シタル時ハ檢察官民事原告人ノ請求

ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其證人ノ陳述中被告人ヲ退席セシムルトヲ得

裁判長ハ證人陳述ヲ終リタル後再ヒ被告人ヲ公廷ニ呼入レ其陳述シタル條件ヲ告知シ且被告人ニ意見アル時ハ之ヲ申立シム可シ

第三百九十六條 裁判長ハ第三百條ニ定メタル手續ノ終リタル後公訴ニ付キ辯論ノ終結シタルトヲ言渡ス可シ

第三百九十七條 檢察官及ヒ被告人ハ辯論中ニ發見シタル條件ニ付キ豫審ヲ求ムルトヲ得裁判所ニ於

テ其請求ヲ認可シタル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル
裁判所ノ判事一名ヲシテ豫審ヲ爲シ且其報告書ヲ
差出サシム可シ

第三百五十七條第一項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適
用ス

第三百九十八條 辯論終結ノ言渡アリタル時ハ檢察
官法律適用ノ爲メ其意見ヲ陳述ス可シ

被告人及ヒ辯護人ハ檢察官ノ意見其當ヲ得サル
ヲ辯論スルヲ得

第三百九十九條 前條ノ辯論ヲ終リタル後民事原告

人ハ私訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ被告人

辯護人及ヒ民事擔當人ハ答辯ヲ爲スヲ得

檢察官ハ私訴ニ付キ其意見ヲ陳述ス可シ

裁判所ニ於テハ私訴ノ辯論ヲ延期スルヲ得但閉
廳前之ヲ判決ス可シ

第四百條 被告事件重罪ニシテ且證憑充分ナル時ハ
法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

又第二百二十四條第三以下ノ場合ニ於テハ免訴ノ
言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ

第四百一條 犯罪ノ證憑充分ナラサル時ハ無罪ノ

言渡ヲ爲シ且被告人ヲ放免ス可シ
又原被ノ要償ニ付キ第三百九十九條ノ規則ニ從ヒ
裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百二條 辯論中公訴狀ニ記載シタル事件ニ附帶
セサル他ノ重罪輕罪ヲ發見シタル場合ニ於テ檢察
官ノ請求アル時ハ重罪裁判所ヲ開キタル裁判所ノ
判事一名ヲシテ豫審ヲ爲サシメ本會又ハ次會ニ於
テ本案ノ事件ト共ニ之ヲ裁判ス可シ

第四百三條 檢察官其他訴訟關係人ハ重罪裁判所ノ
對審裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可シ得

第四百四條 關席裁判ヲ爲スニハ裁判長書記ヲシテ
公訴狀及ヒ必要ナリトスル豫審書類ヲ朗讀セシメ
又原被證人ノ陳述ヲ聽ク可シ
檢察官ハ法律ノ適用ニ付キ意見ヲ陳述シ民事原告
人ハ要償ニ付キ意見ヲ陳述ス可シ
民事擔當人ハ答辯スル可シ得

第四百五條 關席裁判言渡書ハ檢察官其他訴訟關係
人ノ請求ニ因リ本人又ハ其住所ニ送達ス可シ
第四百六條 關席裁判ニ係ル刑ノ言渡ニ對シテハ檢
察官ニ非サレハ上告ヲ爲ス可シ得ス

民事原告人及ヒ民事擔當人ハ私訴ノ裁判言渡ニ對シ上告ヲ爲ス可トヲ得

第四百七條 關席裁判ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ハ刑ノ期滿免除ニ至ルマテ何時ニテモ故障ヲ爲ス可トヲ得但捕ニ就キタル時ハ十日内ニ故障ヲ爲ス可シ

第四百八條 故障ノ申立ハ關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
重罪裁判所ニ於テハ先ツ其故障ヲ受理ス可キヤ否ヲ判決ス可シ

其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ本會又ハ次會ニ於テ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ裁判ヲ爲ス可シ
第四百九條 關席裁判ヲ爲シタル重罪裁判所閉廳ノ後ハ其地ヲ管轄スル控訴裁判所ニ故障ノ申立ヲ爲ス可シ

控訴裁判所ニ於テ其故障ヲ受理ス可キ者ト判決シタル時ハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ重罪裁判所ノ裁判ヲ受ク可キノ言渡ヲ爲ス可シ

第五編 大審院ノ職務

第一章 上告

第四百十條 檢察官及ヒ被告人ハ豫審又ハ公判ノ言

渡ニ對シ左ノ場合ニ於テ上告ヲ爲ス得

一法律ニ背キ忌避ノ申立ヲ認可セサル時

二裁判所ノ構成規則ニ背キタル時

三法律ニ背キ管轄違又ハ管轄ナリトノ言渡若クハ

管轄ニ非サル裁判所ニ事件ヲ移スノ言渡アリタ

ル時

四法律ニ於テ無効ノ記載アル規則ニ背キタル時又

ハ無効ノ記載ナキ規則ニ背キタルニ因リ異議ノ申立アリタル場合ニ於テ之ヲ認可セサル時

五法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル時

六法律ニ定メタル場合ニ於テ檢察官ノ意見ヲ聽カサル時

七裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルトヲ得可キ場合ヲ除クノ外請求ヲ受ケサル事件ニ付キ判決ヲ爲シタル時

八裁判言渡ヲ公行セス又ハ傍聽ヲ禁スルノ言渡ナ

クシテ訊問及ヒ辯論ヲ公行セサル時

九事實及ヒ法律ニ依リ言渡ノ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アル時

十擬律ノ錯誤アル時

十一越權ノ處分アル時

第四百十一條 免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ定メタル規則ニ背キタルト又ハ犯罪ノ場所ニ因リ管轄違アリト雖モ上告ヲ爲ストヲ得ス

第四百十二條 民事原告人被告人及ヒ民事擔當人ハ

私訴ニ關スル豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ第四百十條ニ定メタル理由ニ付キ上告ヲ爲ス可トヲ得

第四百十三條 上告ノ對手人ハ大審院ノ判決アルマテ何時ニテモ附帶ノ上告ヲ爲ス可トヲ得

大審院檢事長モ亦附帶ノ上告ヲ爲ス可トヲ得

第四百十四條 上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算ス

第四百十五條 豫審又ハ公判ノ言渡ニ對シ上告アリタル時ハ勾留保釋責付釋放及ヒ放免ノ言渡ヲ除ク

ノ外其執行ヲ停止ス

第四百十六條 上告ヲ爲サントスル者ハ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

上告ノ申立書ハ其申立アリタルヨリ二十四時内ニ書記ヨリ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十七條 上告申立人ハ其申立ヲ爲シタルヨリ五日内ニ趣意書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
書記ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ對手人ニ送達ス可シ

第四百十八條 對手人ハ上告趣意書ヲ受取リタルヨ

リ五日內ニ答辯書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可
シ

書記ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時內ニ之
ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第四百十九條 檢察官ヨリ差出ス可キ上告趣意書又
ハ答辯書ハ二通ヲ作り一通ヲ大審院ニ差出シ一通
ヲ對手人ニ送達ス可シ

私訴ノ裁判言渡ニ對シ訴訟關係人ヨリ差出ス可キ
上告趣意書又ハ答辯書ニ付テモ亦同シ

第四百二十條 書記ハ前數條ニ定メタル期限經過シ

タル後速ニ訴訟書類及ヒ上告書類ヲ其裁判所ノ檢
察官ニ差出ス可シ

檢察官ハ其書類ヲ五日內ニ大審院檢察長ニ差出シ
且意見アル時ハ之ヲ添フ可シ

檢察長ハ上告事件ヲ刑事局ノ簿冊ニ登記ス可キ
ヲ院長ニ請求ス可シ

第四百二十一條 上告申立人及ヒ對手人ハ代言人ヲ
差出ス可キヲ得

重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲シ又ハ檢察
官ヨリ重罪ノ刑ニ該ル可キ者トシテ上告ヲ爲シタ

ル場合ニ於テ刑ノ言渡ヲ受ケタル者自ラ代言人ヲ
選任セサル時ハ院長ノ職權ヲ以テ其院所屬ノ代
人中ヨリ之ヲ選任ス可シ

第四百二十二條 院長ハ刑事局判事中ニテ專任判事
一名ヲ命ス可シ

專任判事ハ一切ノ書類ヲ檢閲シ其報告書ヲ作ル可
シ但自己ノ意見ヲ付ス可カラス

第四百二十三條 上告申立人及ヒ對手人ハ專任判事
ノ報告書ヲ差出スマテハ大審院書記局ヲ經由シテ
其趣意ヲ擴張ス可キ辯明書ヲ差出スヲ得

專任判事報告書ヲ差出シタル後辯明書ヲ差出シタ
ル時ハ之ヲ其報告書ニ添フ可シ

第四百二十四條 書記ハ開廷ヨリ三日前ニ開廷ノ日
時ヲ上告申立人及ヒ對手人ノ代言人ニ報知ス可シ

第四百二十五條 開廷ノ日ニハ公廷ニ於テ專任判事
其報告書ヲ朗讀ス可シ

檢事長及ヒ代言人ハ各其趣意ヲ辯明ス可シ
私訴ノ上告ニ付テハ檢事長最終ニ其意見ヲ陳述ス
可シ

第四百二十六條 上告申立人又ハ對手人ヨリ代言人

ヲ差出サ、ル時ハ其儘ニテ判決ヲ爲ス可シ

第四百二十七條 大審院ニ於テ上告ノ理由ナシトスル時ハ之ヲ棄却スルノ言渡ヲ爲ス可シ

第四百二十八條 大審院ニ於テ豫審又ハ公判ノ言渡ニ對スル上告ニ付キ破毀ノ原由アリトスル時ハ其言渡ノ全部ヲ破毀シ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可シ但後ノ數條ニ記載シタル場合ハ此限ニ在ラス

第四百二十九條 擬律ノ錯誤若クハ法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサル丁ニ因リ原裁判言渡ヲ破

毀シタル時ハ其事件ヲ移ストナク大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十條 豫審又ハ公判ノ手續規則ニ背キタル丁アリト雖モ其後ノ手續ニ利害ヲ及ホサ、ル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ストナク止タ其手續ヲ破毀ス可シ

第四百三十一條 豫審又ハ公判ノ言渡ノ幾分ニ對シ上告アリタル場合ニ於テ他ノ部分ニ關係アラサル時ハ大審院ニ於テ其上告ニ係ル部分ヲ破毀シ法律ニ從ヒ直チニ相當ノ裁判言渡ヲ爲シ又ハ其事件ヲ

他ノ裁判所ニ移ス可シ

第四百三十二條 大審院ニ於テ原裁判言渡ヲ破毀シ直チニ裁判言渡ヲ爲シタル時ハ原裁判所又ハ他ノ裁判所ヲシテ其執行ヲ爲サシム可シ

第四百三十三條 大審院ニ於テ破毀シタル事件ヲ他ノ裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲ス可キ時ハ原裁判所ニ接近シタル同等ノ裁判所ヲ定示ス可シ其單ニ私訴ニ係ル事件ハ之ヲ民事裁判所ニ移ス可シ

第四百三十四條 法律ニ係ル大審院ノ判決ハ確定ノ者トス

大審院ヨリ送付ヲ受ケタル裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ通常ノ規則ニ從ヒ更ニ上告ヲ爲ストヲ得

第四百三十五條 法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ相當ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ定期内ニ上訴スル者ナクシテ其裁判言渡確定シタル時ハ大審院檢事長ヨリ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ非常上告ヲ爲ストヲ得

非常上告アリタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス可シ

第四百三十六條 左ノ場合ニ於テハ大審院ノ裁判言
渡ニ對シ檢事長其他訴訟關係人ヨリ其院ニ哀訴ス
ルコトヲ得

一大審院ニ於テ前數條ニ定メタル式ヲ履行セサル
時

二訴訟關係人ヨリ申立タル條件ニ付キ判決ヲ爲サ
ル時

三同一ノ裁判言渡ニ付キ二箇ノ條件齟齬シタル時
第四百三十七條 哀訴ヲ爲サントスル者ハ裁判言渡
アリタルヨリ三日内ニ書記局ニ其申立ヲ爲ス可シ

書記ハ申立書ヲ受取リタルヨリ三日内ニ之ヲ對手
人ニ送達シ對手人ハ同一ノ期限内ニ其答辯書ヲ差
出ス可シ

大審院ニ於テハ通常上告ノ規則ニ從ヒ哀訴ノ判決
ヲ爲ス可シ

第四百三十八條 大審院ノ裁判言渡ハ其言渡アリタ
ルヨリ三日間又哀訴アリタル時ハ其判決アルマテ
執行ヲ停止ス

第二章 再審ノ訴

第四百三十九條 再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕

罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ爲メ之ヲ爲ス
トヲ得但裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ爲ストヲ得
ス

一人ヲ殺シタル罪ニ付キ刑ノ言渡アリタル後其言
渡ノ日ニ當リ殺サレタリト認メラレシ者現ニ生
存シ又ハ犯罪前既ニ死去シタルノ確證アリタル
時

二同一ノ事件ニ付キ共犯ニ非スシテ別ニ刑ノ言渡
ヲ受ケタル者アリタル時

三犯罪アル以前ニ作りタル公正ノ證書ヲ以テ當時

×一四

其場所ニ在ラサルトヲ證明シタル時

四被告人ヲ陷害シタル罪ニ因リ刑ノ言渡ヲ受ケタ
ル者アリタル時

五公正ノ證書ヲ以テ訴訟書類ニ偽造又ハ錯誤アル
トヲ證明シタル時

第四百四十條 再審ノ訴ヲ爲ストヲ得可キ者左ノ如
シ

一刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官

二刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判
所ノ檢事長

三大審院檢事長但司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

四刑ノ言渡ヲ受ケタル者

五刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタル時ハ其親屬

第四百四十一條 再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲ス得

第四百四十二條 再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原裁判言渡書ノ謄本及ヒ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ
原裁判所ノ檢察官ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ大

審院檢事長ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢察官及ヒ控訴裁判所檢事長自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスル時ハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第四百四十三條 大審院ニ於テハ檢事長ノ請求ニ因リ速ニ專任判事一名ヲシテ其取調ヲ爲シ報告書ヲ差出サシム可シ

第四百四十四條 大審院ニ於テハ他ノ事件ヲ閣キ刑事局判事全員會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ判決ヲ爲ス可シ

第四百四十五條 大審院ニ於テ再審ノ原由アルトヲ
認メタル時ハ原裁判言渡ヲ破毀シ公訴及ヒ私訴ニ
付キ再審ヲ爲ス可キトヲ言渡シ其事件ヲ原裁判所
ト同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可シ
其送付ヲ受ケタル裁判所ニ於テハ通常ノ規則ニ從
ヒ裁判ヲ爲ス可シ

第四百四十六條 死者ノ親屬ヨリ再審ノ訴ヲ爲シタ
ル場合ニ於テ大審院ニテ再審ノ原由アルトヲ認メ
タル時ハ其事件ヲ他ノ裁判所ニ移ストナク原裁判
言渡ヲ破毀ス可シ

第四百四十七條 再審ノ裁判ニ因リ無罪ノ言渡アリ
タル時又ハ前條ノ場合ニ於テ破毀ノ言渡アリタル
時ハ其者ノ名譽ヲ復スル爲メ其言渡書ヲ揭示公告
ス可シ

第三章 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四百四十八條 通常裁判所ト特別裁判所トヲ問ハ
ス管轄ニ非サルノ言渡ヲ爲シ其言渡確定シタル時
又忌避ノ原由若クハ非常ノ事變ニ因リ訴訟事件ヲ
管理スルヲ能ハサル時ハ檢察官其他訴訟關係人ヨ
リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲ストヲ得

大審院檢事長ハ司法卿ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可トヲ得

第四百四十九條 裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ訴訟書類ヲ添ヘ之ヲ大審院ノ書記局ニ差出ス可シ

第四百五十條 大審院ニ於テハ刑事局判事五名以上會議局ニ集會シ專任判事ノ報告書及ヒ檢事長ノ意見書ニ依リ裁判管轄ヲ定ムルノ訴ヲ判決シ其事件ヲ管理ス可キ裁判所ヲ定示ス可シ

第四章 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ

訴

第四百五十一條 犯罪ノ性質被告人ノ身分員數地方ノ民心其他重大ナル事情ニ因リ裁判ニ對シ紛擾又ハ危險ヲ生スルノ恐アル時ハ公安ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移ス可トヲ得

第四百五十二條 公安ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ司法卿ノ命ニ因リ大審院檢事長ヨリ其院ニ之ヲ爲ス可シ

第四百五十三條 大審院ニ於テハ會議局ニテ訴訟關係人ノ申立ヲ聽クナク速ニ前條ノ訴ヲ判決ス可

第四百五十四條 被告人ノ身分地方ノ民心又ハ訴訟ノ模様ニ因リ裁判ノ公平ヲ維持スルヲ能ハサルノ恐アル時ハ嫌疑ノ爲メ其事件ヲ同等ナル他ノ裁判所ニ移スヲ得

第四百五十五條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ハ管轄裁判所ノ檢察官其他訴訟關係人ヨリ之ヲ爲スヲ得

民事原告人嫌疑アル裁判所ニ私訴ヲ爲シ又被告人其裁判所ニ於テ異議ノ申立ナクシテ本案ニ付キ辯

論ヲ爲シタル時ハ前項ノ訴ヲ爲スヲ得ス

第四百五十六條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴ヲ爲スニハ其趣意書二通ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ

書記ハ速ニ一通ヲ對手人ニ送達シ對手人ハ其送達アリタルヨリ三日内ニ答辯書ヲ差出スヲ得

第四百五十七條 大審院ニ於テハ第四百五十條ノ規則ニ從ヒ前條ノ訴ヲ判決ス可シ

第四百五十八條 嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴アリタル時ハ裁判所ニ於テ其訴訟手續ヲ停止ス

第六編 裁判執行復権及ヒ特赦

第一章 裁判執行

第四百五十九條 重罪輕罪違警罪ノ刑ハ裁判確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行ス可カラス

第四百六十條 死刑ノ言渡確定シタル時ハ檢察官ヨリ速ニ訴訟書類ヲ司法卿ニ差出ス可シ
司法卿ヨリ死刑ヲ執行ス可キノ命令アリタル時ハ三日内ニ其執行ヲ爲ス可シ

第四百六十一條 死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタル時ハ直チニ之ヲ執行ス可シ

第四百六十二條 刑ノ執行ハ原裁判所ノ檢察官又ハ大審院ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢察官ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ
罰金科料裁判費用及ヒ沒收物品ハ檢察官ノ命令書ニ依リ之ヲ徵收ス可シ
破壊又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢察官之ヲ處分ス可シ

第四百六十三條 死刑ノ執行ニ付テハ書記其始末書ヲ作り刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

其他刑ノ執行ニ關スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百六十四條 裁判言渡確定シ又ハ關席裁判アリタル時ハ其刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ書記既決犯罪表ヲ作り左ノ條件ヲ記載ス可シ但大審院ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其執行ヲ爲シタル裁判所ノ書記之ヲ作ル可シ
一 犯人ノ氏名年齢職業住所及ヒ出生ノ地
二 罪名刑名
三 再犯

四裁判言渡ヲ爲シタル年月日

五對審裁判又ハ關席裁判

第四百六十五條 既決犯罪表ハ二通ヲ作り一通ヲ司法省ニ送致シ一通ヲ其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

違警罪ノ既決犯罪表ハ一通ヲ作り其裁判所ノ書記局ニ藏置ス可シ

第四百六十六條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ノ條件ニ付キ疑義ノ申立又ハ其執行ニ付キ異議ノ申立ヲ爲シタル時ハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ

之ヲ判決ス可シ

第四百六十七條 刑ノ言渡ヲ受ケタル者逃亡ノ後捕ニ就キタル場合ニ於テ人違ノ申立アリタル時ハ之ヲ認定スル爲メ前ニ其罪ヲ認メタル裁判所ニ送致ス可シ

裁判所ニ於テ本犯ナルトヲ認定スルト能ハサル時ハ事實參考ノ爲メ曾テ其事件ニ干預シタル裁判官檢察官書記又ハ原被ノ證人ヲ呼出ストヲ得

第四百六十八條 前二條ノ場合ニ於テハ公廷ニテ刑ノ言渡ヲ受ケタル者ノ申立及ヒ檢察官ノ意見ヲ聽

キ裁判言渡ヲ爲ス可シ但其言渡ニ對シテハ上訴ヲ許サス

第四百六十九條 賠償及ヒ訴訟關係人ニ償還ス可キ裁判費用ニ付キ其言渡ノ執行ハ通常民事ノ規則ニ從フ

第二章 復權

第四百七十條 復權ノ願ハ刑法第六十三條ニ定メタル期限經過シタル後刑ノ言渡ヲ受ケタル者ヨリ司法卿ニ之ヲ爲ス可シ
復權ノ願書ニハ本人署名捺印シ現ニ住スル地ノ始

審裁判所檢事ニ之ヲ差出ス可シ

第四百七十一條 復權ノ願書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

- 一 裁判言渡書ノ謄本
- 二 主刑ノ滿期特赦又ハ期滿免除ト爲リタルトヲ證明スル書類
- 三 假出獄及ヒ假ニ監視ヲ免セラレタルノ證書
- 四 賠償及ヒ裁判費用ヲ辨濟シ又ハ其義務ヲ免カレタルノ證書
- 五 過去現在ノ住所及ヒ生計ヲ記載スル書類

第四百七十二條 檢事ハ願人ノ品行其他必要ノ取調ヲ爲シ前條ノ書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ控訴裁判所檢事長ニ差出ス可シ

第四百七十三條 檢事長ハ更ニ必要ノ取調ヲ爲シ復權ノ願ニ關スル書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ司法卿ニ差出ス可シ

第四百七十四條 司法卿ハ復權ノ願ニ關スル書類ヲ檢閲シ其願ヲ允許ス可キ者ト認メタル時ハ速ニ上奏ス可シ

第四百七十五條 勅裁又ハ司法卿ノ意見ニ因リ復權

ノ願ヲ棄却シタル時ハ司法卿ヨリ其旨ヲ控訴裁判所檢事長ニ通知シ檢事長ヨリ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ通知ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ刑法第六十三條ニ定メタル期限ノ半ヲ經過スルニ非サレハ更ニ其願ヲ爲ス可ク得ス

更ニ復權ノ願ヲ爲スニ付テモ亦前數條ノ規則ニ從フ

第四百七十六條 復權ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ其裁可狀ヲ控訴裁判所檢事長ニ送致シ檢事長ヨ

リ願書ヲ差出シタル始審裁判所檢事ニ送致ス可シ
檢事ハ裁可狀ノ謄本ヲ願人ニ下付ス可シ
又刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ裁可狀ノ謄本ヲ送
致シ其裁判所ニ於テハ之ヲ裁判言渡書ニ記入ス可
シ

第三章 特赦

第四百七十七條 特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時
ニテモ檢察官又ハ監獄長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司
法卿ニ申立ルヲ得
監獄長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ス時ハ檢察官ヲ經由ス

可シ但檢察官ハ意見書ヲ添フ可シ
特赦ノ申立アリタル時ハ司法卿ヨリ其書類ニ意見
書ヲ添へ上奏ス可シ

第四百七十八條 司法卿ハ刑ノ言渡確定シタル後何
時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スヲ得
死刑ヲ除クノ外特赦ノ申立アリト雖モ刑ノ執行ヲ
停止セス

第四百七十九條 特赦ノ申立棄却アリタル時ハ司法
卿ヨリ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ其旨
ヲ通知ス可シ

第四百八十條 特赦ノ裁可アリタル時ハ司法卿ヨリ
刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢察官ニ特赦狀ヲ送
致ス可シ此場合ニ於テハ第四百七十六條ノ規則ニ
從フ

東京博聞社印行

明治十三年七月十九日出版御届
同年同月出版

總刻人

兵庫縣士族
股野潛
東京府芝區愛宕下町
三丁目壹番地寄留

東京銀坐四丁目
博聞本社

下京崎藥師通款屋町東
全分社

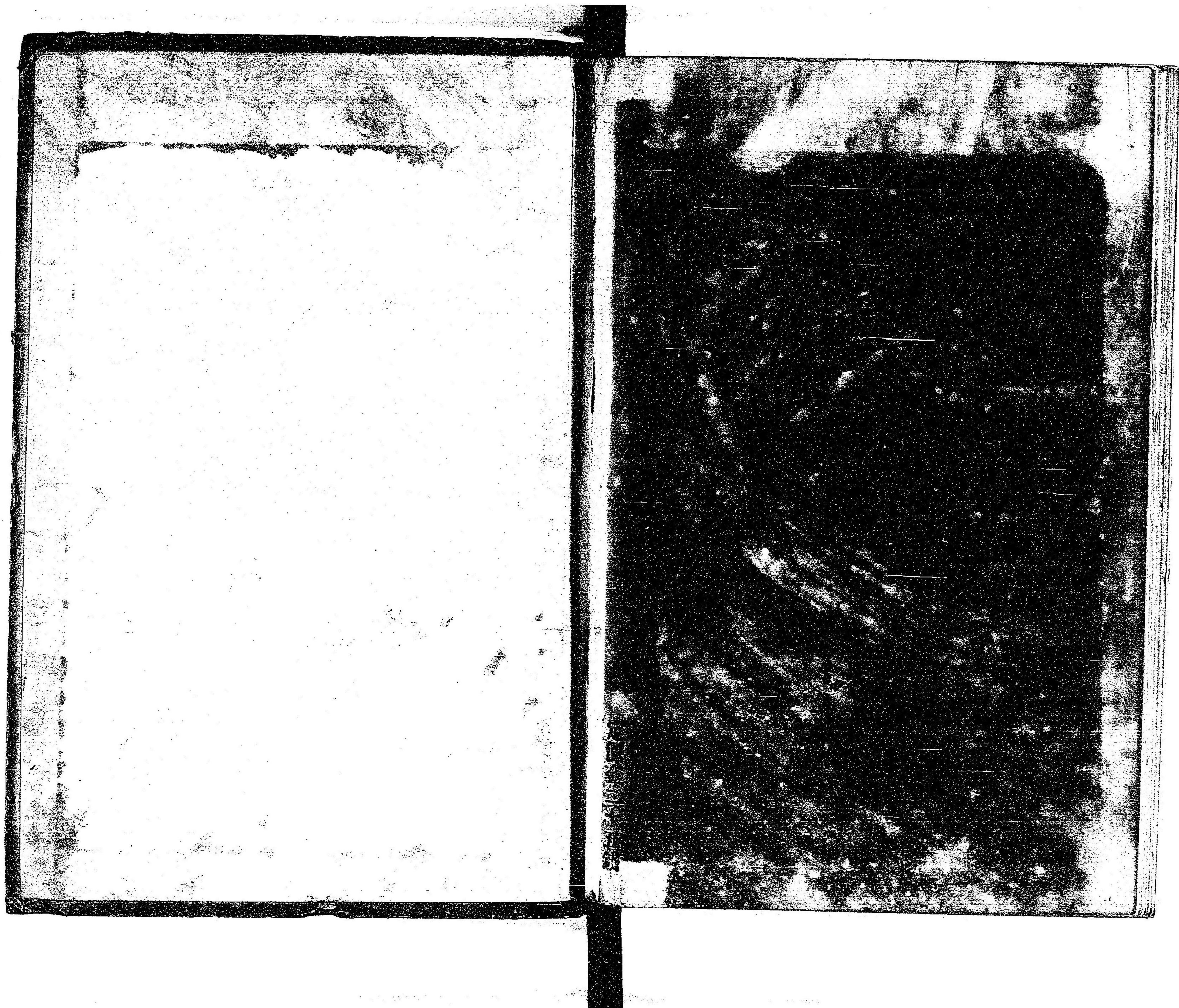
弘 大坂心齋橋通南
久寶寺町四丁目
全分社

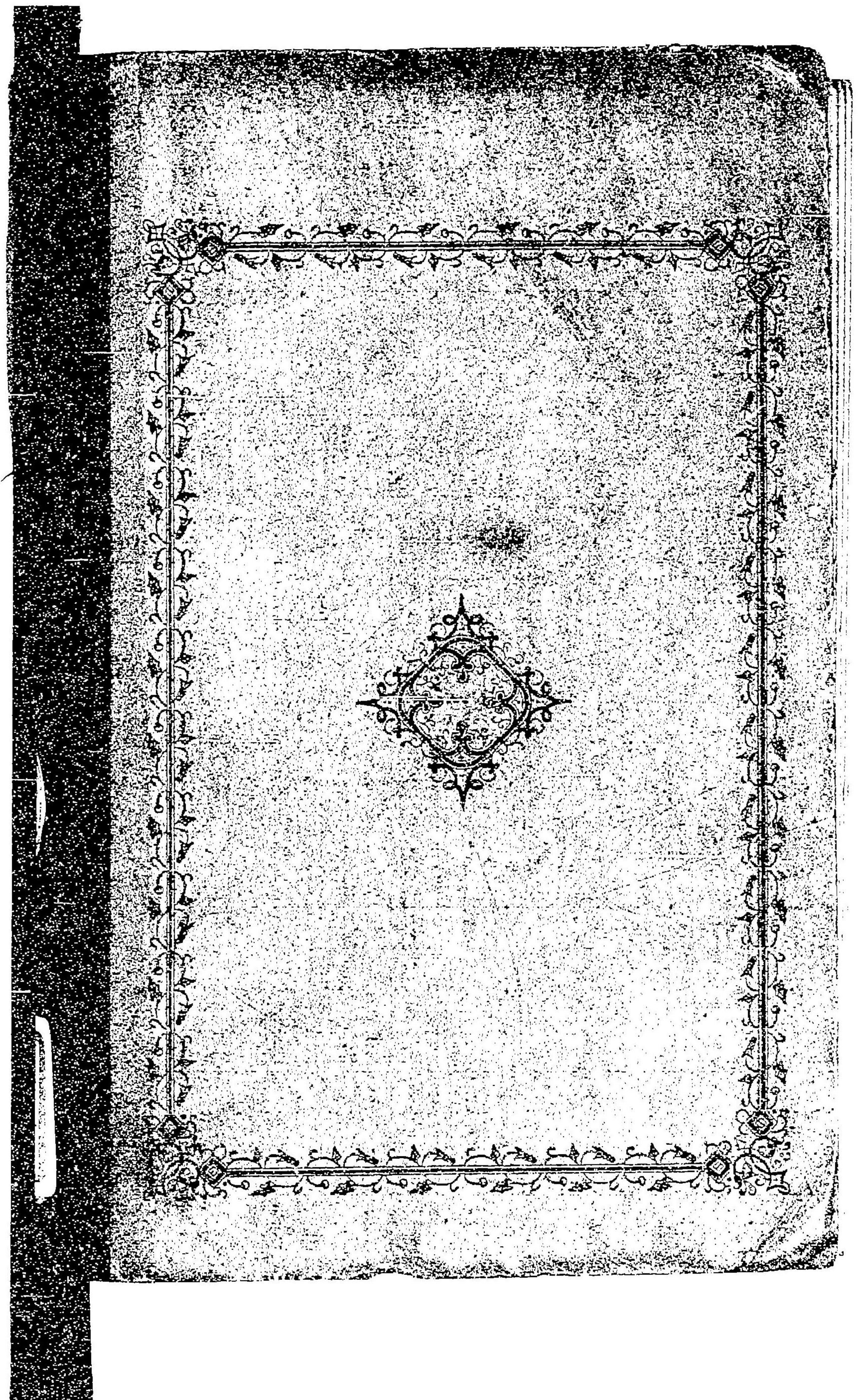
所 千葉縣下千葉
全分社

埼玉縣下浦和
全分社



The right page of the document is mostly blank, showing only faint, illegible markings and noise. There are some very light, blurry shapes that might be remnants of text or a table, but they cannot be discerned. The page appears to be a continuation of the document shown on the left page.





036863-000-0

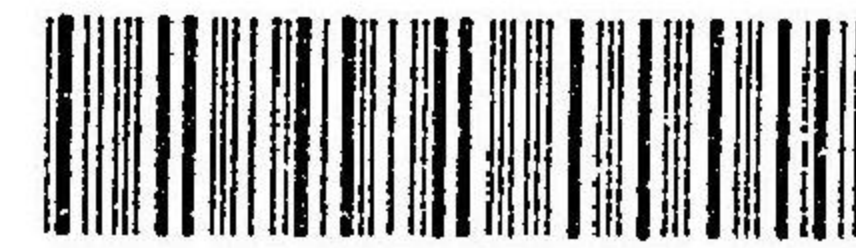
CZ-791-01

治罪法

博聞社

M13

BBS-0345



東京圖書館
門三二
類
九架
號